

仁心堂の天使たち

私が看護師を目指すわけ

今井 敦志

青山ライフ出版

目次

| | | |
|-----|-------------|-----|
| 第1章 | 父の入院 | 6 |
| 第2章 | 父の病状と二人の天使 | 42 |
| 第3章 | ICUでの出来事 | 94 |
| 第4章 | 病棟での出来事 | 140 |
| 第5章 | 新たな試練、そして退院 | 184 |
| 第6章 | 憧れから決意へ | 202 |

仁心堂の天使たち

私が看護師を目指すわけ

第1章 父の入院

2019年5月23日 木曜日

明日は、父（今田 篤哉 54歳）の2回目の脳腫瘍摘出手術だ。

手術が終わったら、父は手術室からそのままICUに移るので、555号室にある父の荷物を、私（今田 恵理 15歳）が預かる貴重品と病棟に預ける荷物、それとICUに持っていく荷物を整理するため、私は東京の仁心堂大学医学部附属病院に来ている。

1回目の脳腫瘍摘出手術は、5月10日 金曜日 朝の9時に開始され、父が麻酔から覚めて、手術室から出て来たのが翌朝の7時。22時間に及ぶ大手術だったと、父の兄である真一叔父さんから聞いている。

聞いているとは？

約1年半前の秋、中学2年生の時に、母（理香 享年38歳）を交通事故で亡くした私は、その喪失感から立ち直れないまま情緒不安定となってしまい、母が亡くなってから2か月後の1月、3学期の初めから宇都宮市内の中学に転校して、母の双子の妹である真理ちゃんの元で暮らしている。

現在、高校に進学したばかりの私は新しい環境にも慣れて、順調な高校生活を送り始めていた。だけど中学の時、転校したての私になにかと親切に接してくれて、数少ない親友と呼べる存在となった級友二人は、別の高校に進学してしまったので、まだこの高校には親友と呼べる友達がいなかった。そのせいもあり、私は明るく元気一杯な高校1年生とは、お世辞にも言える状態ではなかったのだ。

この私の状態を父が気遣い

「脳腫瘍の手術を受けるが、幸い見つかった腫瘍は小さいので命の危険は全くない。また、腫瘍が大きくなると後遺症のリスクが高くなるが、腫瘍の大きさは直径1センチほどだったので、後遺症のリスクも極めて低い。それと手術の立会には、兄の真一叔父さんが来てくれるから心配するな」と私に説明していた。

最初私は、真一叔父さんが岐阜から立会いに来るのだから、宇都宮に居る私が立会に行かないのはおかしい。それに腫瘍が小さいから手術はリスクが低いと言われても、NOリスクではないから、心配するなは無理な相談だと思っていた。だけど、医療関連の会社に勤務している父が、専門用語を用いて手術の安全性を何度も説明してくれるので、リスクに対する心配は薄らいできていたのだが、母を交通事故で亡くした日

の重苦しく耐えがたかった待合室の情景が蘇ってしまい、今回は冷静でいられるのだろうかという不安が募ってきてしまった。

そんな私の状態に、当然ながら気付いている真理ちゃんはおそらく私と一緒に、リスクが低い手術立会のために東京まで来てくれるはずである。でもそうになると、真理ちゃんの娘である小学生のひなたと小春の面倒は、祖父母に見てもらうことになるのだが、3月末、真理ちゃんに心配をかけてしまう出来事をしてかしていた私は、自分のわがままを押し通して、是が非でも立会いに行くという発言は、待合室で冷静でいられる自信がないのも重なって、気が引けて口に出せなかったのだ。

だから、こんな諸事情から手術当日の立会は、父の意向通り真一叔父さんにお任せをして、私は学業を優先することとなっていた。

◆5月8日 水曜日

《髄膜腫 栄養血管塞栓術》

腫瘍摘出に先立って、腫瘍に繋がっている血管を塞ぐカテーテル手術が行われた。父いわく

「血管を塞いでおけば腫瘍を取った時に出血しないだろ。それからカテーテル手術とは、細い長い管を、大腿部の動脈から入れて血管の中を誘導し、その管の中を治療機器を通過させて血管内から手術を行う方法なので、今回は開頭しないし、本番前の予行練習みたいなものだから心配はいらない」

そうだ。でもそんなに簡単に

「あれもこれも心配するな」

と言われても、私には到底無理な相談なわけで、当日、私は不安を抱えながらも高校に行き授業を受けていたが、先生の話はぜんぜん耳に入ってこない。

「こんなことなら、いっそのこと病院に行っていれば良かった」

私は後悔するが

「無事手術終わる」

という真一叔父さんからの連絡を、ただ待つしかなかったのだ。

手術は数時間で無事終了し、また夕刻には、父本人からもLINEで

「手術無事終わったよ。今はベッドの上で安静状態だけど、結構寛いでいます」

の連絡があったので、私は内心、拍子抜けしたくらいだった。ところが、打って変わって10日は、神経を擦り減らすような出来事のオンパレードだった。

◆5月10日 金曜日

《開頭腫瘍摘出術 1回目》

私自身は8日の手術より落ち着いて、真一叔父さんからの連絡を待つことが出来ていたのだが、学校が終わるころになっても

「無事手術終わる」

の連絡が真一叔父さんから届かない。今回は開頭手術だから、前回よりも時間がかかるとは聞いていたが、時間は午後3時を回り、手術開始から6時間が過ぎていた。

「真理ちゃん心配です。なにか情報はない？」

私は良からぬ事態が起きてないか不安に陥ってしまい、LINEで真理ちゃんに状況を聞いてみたのだが「なにも情報がないの。真一叔父さんに状況確認してもらおうね」

私はこの返信を受け取ったまま帰宅時間を迎えてしまう。急ぎ家に戻った私は

「ただいま」

と言うや否や、キッチンで夕食の支度をしている真理ちゃんに

「どう。真一叔父さんからは連絡あった？」

と問いかけた。しかし、返事の代わりに真理ちゃんから見せられた父のメールは、あまりにも衝撃的で愕然とする内容だったのだ。

「恵理ごめん。謝らなくてはならないことがあります。腫瘍が小さいと恵理には言いましたが、過剰な心配をかけさせたくないために、思い悩んで嘘をついてしまいました。実は、腫瘍は直径約8センチメートルあり、恵理がこのメールを読んでいるころは、まだ手術の最中だと思えます。予定では、手術は日付が変わるところまでかかるとのこと。長い闘いとなりますが、腫瘍の大小に関係なく、約束通り無事に戻ってきますので、吉報を真理ちゃんと一緒に待っていてください。」

恵理愛しているよ。それから応援よろしく。父より」